# 小学校の学校支援ボランティア活動に取り組む学生の意識に関する研究―困り感に視点を当てて―

設楽　玲奈（　東京学芸大学　）

## １．目的

本研究の目的は、小学校における学校支援ボランティア活動を経験したことのある学生を対象に、学校支援ボランティア活動に取り組む学生の意識を調査し、学生の困り感の内実について明らかにすることである。

## ２．研究方法

１）対象者：小学校の学校支援ボランティアの経験がある教職課程を履修している大学生 68 名

２）調査方法：質問紙回収法（WEB 調査法）

３）分析方法：授業補助時の難しさ・不安や、活動による学びと困り感の内実に関する質問項目について因子分析（主因子法・Promax 回転）を行い、学生の属性や経験等により意識に差が見られるか検討した（ｔ検定、分散分析）。また、KJ 法を援用して自由記述分析を行った。

## ３．結果と考察

１）因子分析について

学生の意識は「仕事に対する自信」「効力感」「期待されている仕事への実現実感」「児童との関わり」の４因子から構成されていた。

２）ｔ検定・分散分析について

それぞれの因子は、学生の属性や経験等によって軽重があった。軽重の要因をまとめると、「学校に関すること」と「学生に関すること」に分類することができた。「児童との関わり」因子のみ、「学生に関すること」のみが影響していた。児童と学生の関係や接し方に関することは、学校の要因から影響を受けないためだと推察された。

３）自由記述分析について

得られた記述は「ⅰ自分の知識が不十分であること」「ⅱ学校全体での指導の一貫性を持たせること」「ⅲ不安定な立場から児童と関わること」「ⅳ期待されている仕事がわからないこと」「ⅴ期待されている仕事と合致させること」「ⅵ児童の個性に応じた指導をすること」の６つにカテゴリー化でき、これらを学生の困り感の内実とした。また困り感の内実は、因子分析で抽出された４因子に当てはめることができた（図１）。

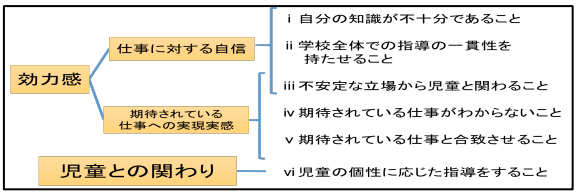


図１　４因子と学生の困り感の内実の関係

４）総合考察

上記を総合的に見ると、図２のようにまとめられ、該当する要因があると、図示された困り感を抱えやすいと推察された。

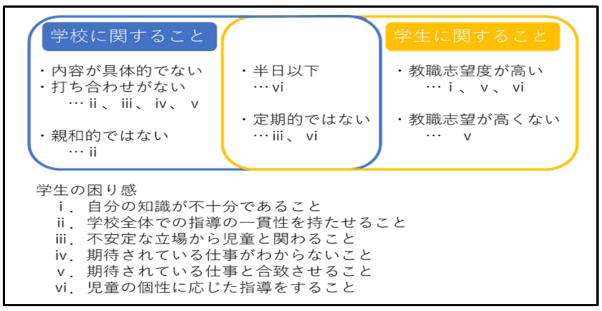


図２　学生の困り感に影響を与える要因

５）特出すべき項目について

保健体育を専攻する学生の方が「仕事に対する自信」因子の平均値が有意に低かった。その原因は解釈しきれなかったが、保健体育を専攻する学生に対する一般的な言説と、学生の認識には違いがある可能性が示唆された。

## ４．結論

本研究では、学校支援ボランティア活動に取り組む学生には、６つの困り感があり、学校や学生が影響を与えていることが明らかになった。学生の困り感を把握し、その要因を解消することで、学校と学生双方にとってよりよい支援に繋がる可能性があることが示唆された（図２）。

## ５．主な参考文献

１）小方朋子・長谷川絵里（2008）特別支援教育体制推進事業「学生支援員」の有効な活動のあり方について、香川大学教育実践総合研究、17、87-93